

Like 19

ツイート

0

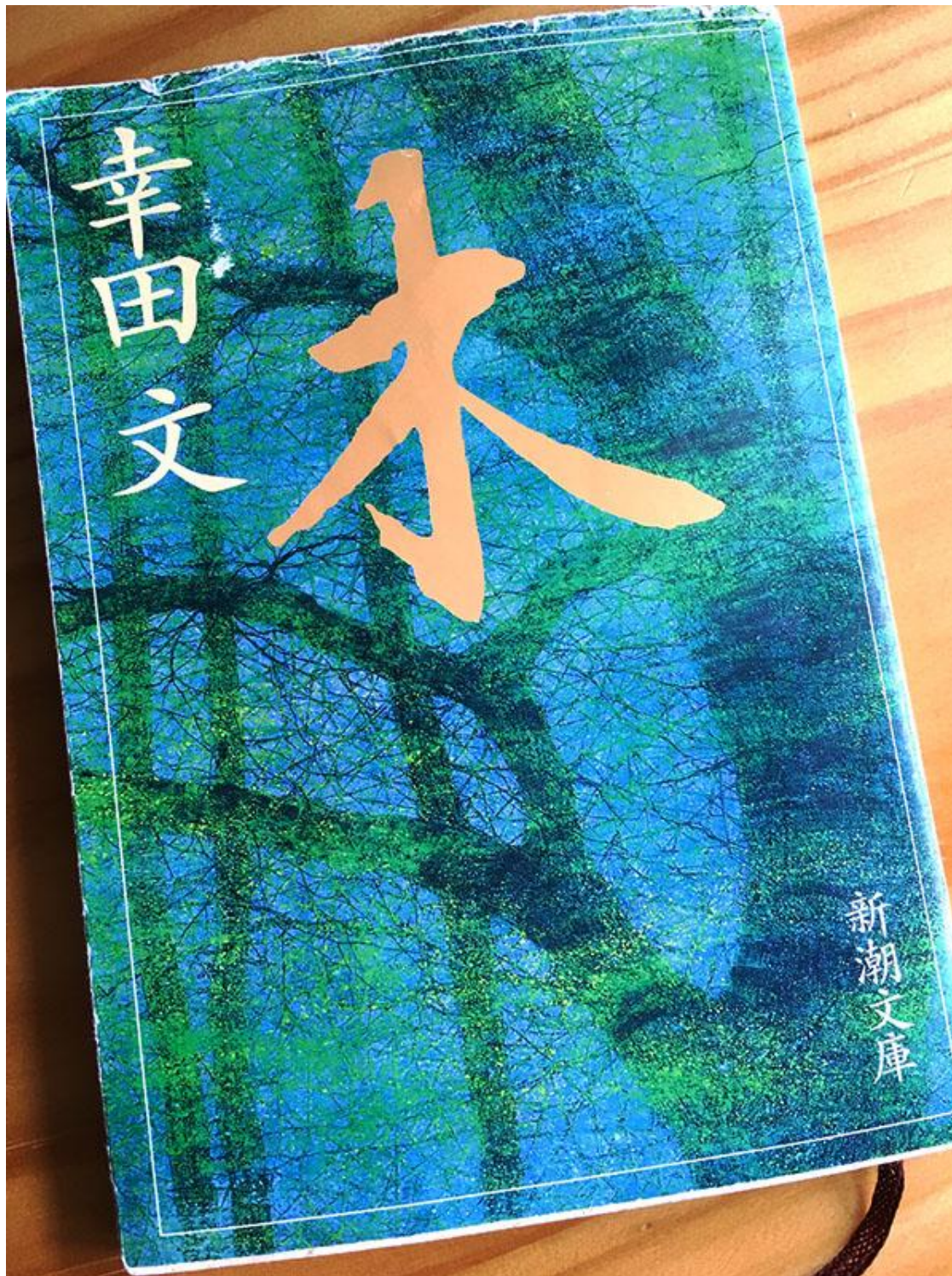


連載 山書の散歩道



『木』（幸田文）

連載第1回（著者＝小林千穂／山岳ライター・編集者）



『木』（新潮文庫）幸田露伴の次女、幸田文（あや）が1971年から1984年にかけて発表したエッセイ。1992年に単行本化され、文庫初版は1995年に刊行された

はじめに

最近感じるのは、以前より本を開く時間をもてなくなったということ。電車での移動中も、カフェで休むときも、寝る前のちょっとした時間も、スマホを眺めることが多くなり、かつての読書の時間はSNSをチェックする時間に置き換わっているように思う。

でも、スマホをスクロールして見た膨大な情報は、今まで開いてきた数々の本より長く記憶に残るものはあったらどうかと、ふと考える。さまざまな「おもしろいもの」がある今、本を読む時間を持つということは、昔より贅沢になったのかもしれない。そんなときだからこそ、一週間のうちのわずかな時間でも、手にするものをスマホから本に換えて、あえて贅沢な時間を楽しもうと思っている。

ここでは、山岳書というジャンルにとどまらず、山や自然を描いたものにも視点を広げて、私が出会った本を紹介していく。そして、近所の散歩道をたどるような身近さで本を開き、山に親しむヒントにしてもらえたらと思う。

もしこの本と出会っていなければ

さて、連載の話が決まったとき、第1回はこれ以外にはないとまさきに頭に浮かんだのが幸田文の『木』だ。日本各地の森林を専門家と訪ね歩いた取材、また自身の体験をもとにし、木をテーマに綴られたエッセイである。

もし、この本と出会っていなければ、私の山登りはずっとつまらないものになっていたかもしれない。森に生きる木、ひいては山の何を見るか、目にしたものをどう感じるかということを知り、幸田さんから教えてもらったように思う。

「木はものをいわずに生きている」。そんな相手の本質を知ろうと、著者は鋭い観察力をもって対話していく。冒頭の「えぞ松の更新」では、倒木更新を輪廻の形と言い、その生々しさに目をそむけず、勇気をもって命の移り変わりを知らうとする。倒木の上に生を受けた若い木をゆすり、倒木の内側にも外側にも伸びる根を

見やる。そして、倒木の内側はどうなっているのかと、厚く覆われた苔を指で押しつけて、元の樹皮を掻き分け、さらに爪を立てて内部をこじる。そこまでして木は性を失うほどに腐っても、木は横には裂けにくいという本性を残していることを知る。そして、若い木、朽ちた木の肌に触れて、古い木はただ死んでいるんじゃない、新しい木もただいきているんじゃない、木は情感をもって生きているものだ気づく。

はじめてこの文を読んだとき、ただ林に立てば、漠然とした景色としてしか映らないであろう、えぞ松の林で、そこまでの深い考察ができることに感服した。これは山でも同じだ。山もものをいわない。ただ登るのでは「きれいだね」「気持ちよかったね」「楽しかったね」というだけで終わってしまう。でも、こちらが関心を持って接すれば、いろいろなことを教えてくれるし、それに感動もするだろう。

幸田さんは「樹木に会い、樹木から感動をもらいたいと思って、林の中を歩くようになった」と言うが、それは私が山に登る最大の理由に通じる気がする。幸田さんの言葉を借りるなら、「味気ない」山登りではなく、心中に新しい養分を補給されるような山登りを私も続けていきたいと思う。『木』は山登りの本当の楽しさにも気づかせてくれる大切な本になっている。



小林千穂（山岳ライター・編集者）両親に連れられて子どものころから山に親しみ、現在はフリーの山岳ライターとして活動している。『山と溪谷』『ワンダーフォーゲル』に多数寄稿するほか、『DVD登山ガイド穂高』（山と溪谷社）、『失敗しない山登り』『もっと楽しむ山登り』（講談社）などの著書がある。ブログ「山でわくわく」を日々更新中。

今回紹介した本（リンクはamazon）

『木』

<https://www.amazon.co.jp/dp/4101116075>

著者ブログ

山でわくわく

<https://ameblo.jp/chihokobayashi/>

 週刊ヤマケイ **注意箇所・危険箇所情報**



信州の山岳遭難現場より
島崎三歩の「山岳通信」



上越・浅草岳

今年の紅葉は鮮やかで見ごたえがあります



山頂から北岳（左）と前岳（右）を展望（写真＝小瀬村 茂）



秋晴れの山頂湿原。守門岳後方に虹色の彩光が見える（写真＝小瀬村 茂）

10月8日、晴れ

この日の登山は、只見線大白川駅から破間川沿いに県道385号線を最奥まで進んだネズモチ平からです。ネズモチ平には100台ほどの駐車ができそうな大きな駐車場とトイレが備わっています。田子倉湖側の六十里越

から見ると急峻に見える浅草岳ですが、ここから見ると山頂は目と鼻の先のように間近に見えます。実際に沢沿いを直登するコースを選べば2時間ほどで登れます。

ネズモチ平から浅草岳へ登りはふたつのルートがありますが、今回は往路は浅草岳へ直登する最短コース、帰路は嘉平与ポッチを越えて尾根上を桜ソネ登山口へと下り、そして林道を歩いてネズモチ平まで戻る周回ルートをとりました。

この日も、日の出に間に合うよう早朝に登頂したものの、山頂は濃いガスで視界はほとんどなく、すでに太陽は昇り始めているところですが、足もと付近以外はなにも見えません。山頂からの展望はあきらめかけていた時、ガスの流れが急にはやくなり、空が明るくなってきました。頭上の青空が次第に広がり始め、赤と黄色で彩られた紅葉真っ盛りの山肌が現れてきます。そして、雲間から守門岳や越後駒ヶ岳、八海山など越後の山々も見えて、朝の光と流れる雲の競演にしばし見とれていました。

今年の紅葉は葉の傷みがあまりないので、鮮やかで見ごたえがあります。山頂部の紅葉は今がちょうど最盛期ですが、来週くらいまでは見ごろの時期が続きそうです。

(文=小瀬村茂/山岳写真工房)

参考書籍

新・分県登山ガイド『改訂版 新潟県の山』

<https://www.yamakei.co.jp/products/2809023660.html>



週刊ヤマケイ

登山地情報



上越・登川米子沢

紅葉の巻機山へ沢から登る



滝のしぶきを浴びながら (写真=川崎拓兵)

株式会社山と溪谷社

〒101-0051東京都千代田区神田神保町1丁目105番地

編集

佐々木 惣

アートディレクター

松澤政昭

SSデザイン

塚本由紀(T&Co.)

技術サポート

福浦一広、金沢克彦

プロデューサー

萩原浩司

©2017 All rights reserved. Yama-Kei Publishers Co., Ltd.